

《公開講演》

和辻哲郎とヘルダー

——精神史的観点から——

一

和辻哲郎（一八八九—一九六〇年）はいうまでもなく、『古寺巡礼』（一九一九年）『風土——人間学的考察』（一九三五年）『人間の学としての倫理学』（一九三四年）『鎖国』（一九五〇年）『倫理学』（上中下、一九三七年、四二（四六）年、四九年）等の著作を通じてひろく知られ、明治以後の日本の精神史に大きな足跡を遺した思想家のひとりである。一方、ヘルダー（一七四四—一八〇三年）は、若くしてカントのもとに学び、のち歴史哲学をめぐってカントと対立的立場をとり、また晩年にはカントの批判哲学の根底的、全面的批判の著作を刊行したひとであるが、今日ではとりわけ歴史哲学の先駆者として知られ、また一九七〇年代以降は、イタリーのヴィーコ（一六六八—一七四四年）とならんで西洋近代の正統的

な合理主義のパラダイムの批判者としてあらたに脚光をあびつつある思想家である。

和辻もヘルダーも、時とところを異にするとはいえ、いずれもしなやかな感受性と言語感覚に恵まれたフマニスト（文人）である点に、一脈あい通ずるものをもつといってよい。

和辻が、このヘルダー（とヴィーコ）に時代の趨勢に先駆けていち早く注目し、またその思想からすくなからぬ影響を受けていることは、多くのひとの知るところだろう。すなわち、彼は、一九五〇年（『鎖国』の四か月後）に『近代歴史哲学の先駆者——ヴィーコとヘルダー』という小著をアテネ文庫から刊行して、この二人の思想家の歴史哲学を詳細に紹介し、またそれに先立って、すでに戦前、主著のひとつである『風土——人間学的考察』の第五章「風土学の歴史的考察」においても「ヘルデルの精神風土

坂部 恵

学」を風土と人間の関わりにかんする考察の重要な先駆的業績のひとつとしてとりあげ、さらに一九四九年刊行の『倫理学』下巻においても、「人間存在の歴史風土的構造」をあつかって、戦時中のヘーゲル流の単線的な歴史哲学からヘルダーの並存的な諸民族・文化の平等と文化多元論ないし多文化主義に傾斜する姿勢（立場の変更ではなく変容）を見せているのである。

その『人間の学としての倫理学』の思考の出発点で、ハイデッガーの時間重視にたいして空間性を重んずる姿勢においてヘルダー的「併存の秩序」(Nebeneinander)——「継起の秩序」(Nacheinander) に対する——への共感を見せるあたりから、戦後の『倫理学』で見せた方向の修正ないし転換にいたるまで、和辻のヘルダーとの関わりは、単に一部の著作・考察の引用・借用といった範囲にとどまらない、より深い思考の方法論に関わる発想の次元での影響ないし共鳴が見られる。

二

ヘルダーの「精神風土学」から和辻が学んだものは、とりわけ主体―客体、人間―自然の対立をこえた生態系（有機的な全体、有機的な統合と「表現」の体系）の一環として、人間とその精神の受動一方でなく能動的側面を含めたライフスタイルを考えようとする（今日の言葉でいえば一種のシステム論的、表現論的ないし表現・了解論的）行き方であったといつてよいだろう。こう

した考え方が、もともと日本的な「間」や「場所」の思考と親和性をもっていたとすれば、比較思想的な見地からして大変興味深いことである。

『風土』の中の「ヘルデルの精神風土学」の章には、つぎのような一節が見られる。

「彼の目ざす学問は、上述のごとく『万象を「生ける有機力」の発現と見る、その説明ではなく内的なものあらわれとしての解釈をこととする』生ける自然の解釈 (Auslegung) である。目に見える形に現われている精神を、通訳すること (Dolmetschen) である。人について言えば、その姿形はただ内部にある衝動構造の外皮に過ぎない。しかもその形態は一つの統合された全体をなしている。その個々の部分をいかに丹念に解剖してみたところで全体の意味はわからない。ちょうど言葉におけるように、個々の綴り文字はなるほど言葉に属してはいるが、しかし意味を持つのは綴られた全体としての単語であって、個々の文字ではない。だから外に現われた形姿において内なるものを指示すること (deuten) 文字の連結からして意味を理解すること、それがここでは学問の方法になる。彼はこの方法を比論的に Physiognomik (人相学) Pathognomik (情相学) などと呼んでいる。Physiologie (生理学) Pathologie (病理学) に対して physis や pathos の真の意味を捕える学問の意である。

それは認識の立場に対して理解の立場を宣揚する。」(全集第八巻、二二—二二頁、以下同様に表記)

ヘルダーは、ちなみに、人相学、骨相学の創始者として知られるラファーターと親交があった。彼らに共通するのは、部分的な(機械的)因果連関よりも心や身体の全体的なゲシュタルト、コンステレーションとそれら相互の關係に注目する(非古典近代科学的な)パラダイムである。和辻のまとめでいえば、「解釈の方法」によって、風土や生活のしかたをつねに「主体的な人間存在の表現と見る態度が一貫していること」に、ヘルダーの思考の特色がある。

体つき、骨相において、その人の性格・氣質があらわれるように、ひとびとの住み暮らす「ところ」において、「風土化」しているのが人間のあり方である。

「それによって、その国土と密接な連関において形成せられている感性的な民族が、その国土に忠実であり、その国土から離れ難く観する、ということの理由がますますあきらかになる。それは彼らの肉体や、生活の仕方の性質や、子供の時から慣れている娯楽や仕事などが、言い換えれば彼らの心の全眼界が、風土的だからである。彼らからその国土を奪うことは、彼らからすべてを奪うことにはかならずぬ。」(同、二二三頁)

ばらばらの要素としてでなく、「人間の生の構造の契機として風土を考察する方法」(同)こそ肝要であろうと和辻はいう。今

日から見れば二十世紀の人文科学の方法を先取りする側面、あるいは若くしてヘルダーの感化を受けたゲーテの自然研究の方法、生きた自然の解釈(直覚的方法による)に通じる側面である。さらにいえば、

「風土とは極言すれば地球上それぞれの土地に固有な、唯一のものなのである。」(同、二二四頁)

こうした把握の背景には、ライブニッツの個別主義、個体重視の哲学がある。ガリレオ・ニュートン、デカルト・カント流の普遍重視の近代(科学)のパラダイムとはおのずから別な流れ、精神的にはビザンチンからアラブ世界、ドゥンス・スコトゥス、ニコラウス・クザヌスを通じて来る流れである。

さて、そこで、ヘルダーの風土学によれば、①個々の感覚が風土的、②想像力が、③実践的な理解が風土的である。それらは、生活の仕方の必要から、民族の精神、伝承、習慣を反映する。④感情や衝動が風土的、(和辻がモンスーンの風土の一構成契機として「しめやかな激情」をあげていることはよく知られている。)⑤幸福もまた風土的である、ということになる。

ここから、ヘルダー独特の人道(Humanität)(生きた具体的人類)の観念が出てくる。

「静かな喜びをもつて妻子を慈しみ、己れの部族に対しても己れの生に対してもただ控え目に働く、——そういう野蛮人の方が人類愛に興奮する人々よりも一層真実な人間だと思う。

人類愛などと言っても、単なる名に過ぎない人類の影に有頂天になっているのであり、そういう愛に生きる人は現実の人ではなくて教養ある影 (gebildete Schatten) なのである。」

(同、二二八頁)

一読きわめてルソー的な文明社会批判を込めた見解だが、この生きた具体的フマニテートの立場を和辻は共感をもってじっくりと紹介、叙述している。

そして、かかる見地からは国家もまた重要でない。

「父と母、夫と妻、子供と兄弟、友だちと仲間——これが我々を幸福ならしめる自然の関係である。国家が我々に与えるものは人為的な道具であるが、しかしそれは一層本質的なものを、すなわち我々自身を奪い取ってしまう。」(同、二一九頁)

さらに、ヘルダーは、「全世界を荒らし回っているヨーロッパ人」にたいして、ナイーブな人間性、人間らしい生活を奪うものとして警告する。ヘルダーには、アメリカ先住民、アフリカ原住民等とその文化にたいするとらわれない評価が見られる。この点は一八九〇年代以降(後述のハーマンの多文化的・多言語的視点とならんで)あらためて評価の対象となりつつあるところである。ついでにいえば、師のカントも、おなじく辺境の地にあって、かえって国民国家から自由なコスモポリタンの「世界市民」的な哲学、永遠平和の哲学を構想しえたのだった。

和辻は、周知のように、戦時中に刊行した『倫理学』中巻で、民族の上に国家をおき、ヘーゲルの有機体的な国家観を最後まで原則的に捨てない。戦時中の超国家主義にもあきらかに一定の共感の姿勢を示している(『尊皇思想とその伝統』など)。戦後、国家の章にはかなりの書きかえが施されたが、それにもかかわらず、「変更」ではなく「変容」(金子武蔵)にとどまっている。この点に和辻には、時代からする限界があり、ヘルダーは、かえって(カント、ハーマン、ヴィーコらとともに)、国民国家にとらわれぬコスモポリタンのフマニテートの視野の広さををもつとの指摘もありえよう。

しかし、和辻の中にも元来こうした開かれたコスモポリタンの、かつ具体的な個々の文化、個々の風土、個々人の生を尊重するフマニテート、フマニストに通じる気質、思考の資質が早くから見られる。たとえば、『古寺巡礼』(とくに初版)に見られる文人的とらわれのなさがそれである。それが、「多文化主義」を率直に認め紹介する先見の明につながったといえよう。

さて、こうして和辻は、ヘルダーの精神の風土学の特色をつぎのように総括する。

「自然と精神を区別しない自然の概念にもとづいて、個々の国民の価値個性を極端に力説したもの」(同、二二〇頁)であり、

① 解釈の方法(カントの批判は受けるが、詩人的直観にもとづ

く)により、

② 国民の個性の尊重を特色とする。国民はそれ自身の特殊性において独自の意義をもち、人道の実現として完成せるものたりうる。

「個々の国民の姿を、人類の究極目的への発展の単なる一過程として、前後継起〔Nacheinander〕の秩序においてのみ見るのは、彼の極力排除するところであった。それは併存〔Nebeneinander〕の秩序において把握せられなくてはならない。」(同)

「したがって彼は、①弁証法的運動におけるごとく生起を主導的に見る立場にたいして、静的な、美しい、生の「有の秩序」を見ようとする。②国民をその劇的動作において見る立場に對して、彫刻的に、あらゆる方向から常態的恒常的なものをその静的構造においてながめようとする。③究極的目的の立場が国民の間に優劣を見、あるいは特定の国民を世界精神の意志の道具(すなわち選民)と見るに對して、個々の民族の個性を平等に尊重する。かくして国民は、その歴史的な業績においてよりも、特殊唯一的な仕方で実現した特殊な生の価値において、すなわち国民性の実現としての生の価値において、世界史の対象とせられる。」(同)

ちなみに、『近代歴史哲学の先駆者』にも、つぎのような一節が見られる。

「まことにヘルダーは、ヴィコよりも一層明白に、地球上のあらゆる民族の存在の権利を公平に承認する、という立場を実現しているのである。(これらの点から見れば、直接の影響の有無にかかわらず、ヴィコの歴史哲学はまっすぐにヘルダーの歴史哲学として展開しているといつてよい。)」(全集第六巻、三九七頁)

三

こうしたヘルダーの「精神の風土学」にインスパイアされた発想は、周知のように、和辻自身の『風土——人間学的考察』における「人間存在の風土的規定」にかんする考察において、和辻自身の言葉で一層詳細な展開を見る。すなわち、人間存在の「歴史的社会的構造」の一環にはかならず風土の型即自己了解の型にはならないとするのである。

この和辻の「人間学的考察」は、「精神論と身体論に分裂した西洋のアントロポロギ」にたいする根底的な批判として展開される。そこで、風土論は、一種の身体論として展開され、発想としては、ほとんど和辻より後の、メルロ＝ポンティの身体論や、あるいはこの時点で和辻のおそらくあずかり知らなかったホワイトヘッドの有機的自然世界論を先取するかのようなおもむきを呈する。

「肉体の主体性は人間存在の空間的・時間的構造を地盤として成

り立つ。」

ここには、『風土』一七頁「生ける主体的身体の延長として環境世界を見るという発想がある。いわばライブニッツの有名な予定調和・心身平行論の説を、人間の心身の関係から、心身統一（アニメートされた身体）としての人間とその環境世界との関係にまでおよぼし拡張した発想である。（こうしたモルフオロジ的な発想は、『プロト・ガイア』等のライブニッツにもあり、ヘルダーの非機械論的（反ニュートンの）・生氣論的な自然観、世界観も、もとはといえばライブニッツのこうした発想を受け継ぎ、またはるかに後述のヘレニズム・ビザンチン期の新プラトン派の自然哲学・言語哲学の流れを汲むものである。）」

身体論として、「併存の秩序」（Nebeneinander）の観点から心身の相互交渉ないしホモロジー的類同物として人間と風土の相互交渉・干渉を見ようとする風土類型論は、今にしておもえば、性格類型論（クラージュス、クレッチマー）に発想において共通するところがあり、あるいは、R・シュタイナーの表現論的な精神論・心身論と一脈あい通じるところがあったと見なしうるかもしれない。

さて、ともあれ「人間学的考察」の副題をもつ『風土』は、それとあい前後して出された『人間の学としての倫理学』におけるよく知られた和辻独特の「人間」理解にもつく倫理学の構想の一応用問題として展開されたものであった。この時点ではまだ倫

理学の一環に組み入れる構想はなく、その外側にとどまっているが、『倫理学』の上巻ではすでに人間存在の空間的構造の章で伏線が敷かれ、のちにとりわけ戦後の『倫理学』下巻において、人間存在の空間的構造の一環として体系中に重要な位置を占めるにいたることはすでにすこし触れたとおりである。ちなみに当該章の構成はつぎのようになっている。

第四章 人間存在の歴史的風土の構造

第一節 人間存在の歴史性

第二節 人間存在の風土性

第三節 歴史性風土性の相即（国民的存在）

第四節 世界史における諸国民の業績

一、世界史第一期 二、第二期 三、第三期

ハイデッガーの時間性重視にたいして、空間性の強調という『風土』以来の対抗的意図は、ここにいわずその具体的展開を見ることがになる。ヘルダーに発する風土論の系譜は、アレクサンダー・フォン・フンボルト、カール・リッター、ラツツェルとたどられ、かたわら、また、ヴィル・ドゥ・ラ・ブラーシュ、ルシアン・フェーブルらフランス人文地理学の業績も正しく位置づけられることになる。（アナール派との関係など考えると、このあたりの今日的観点からする見直しは今後の課題だろう。）

ちなみに、いわゆる後期ハイデッガーの思索は、詩的言語の原初性・基底性の主張において、ハーマン、ヘルダーと軌を一にす

るが、文化多元論、多文化主義的発想に同ずる気配はなく、むしろ周知のように露骨なゲルマン（語）のエスノセントリズムを強く打ち出す。

和辻のファシズムへのコミットメントが、ハイデッガーよりは、浅く、表層的なものにとどまりえた所以も、このあたりと大いに関係することとおもわれる。

四

ともあれ、しかし、和辻におけるヘルダーの影響は、歴史哲学とその一環としての精神の風土学にとどまっており、ヘルダーの思想の射程のすべてを覆うものではなかった。戦後の『近代歴史哲学の先駆者』でも、主題からしても歴史哲学に限定されている。ヘルダーの比較的初期の「併存の秩序」をとりわけて重視する行き方を、正當に評価し位置づけているものの、ヘルダーの全面的継承と研究は、ドイツ、ヨーロッパでもまだこれからのことであるようにおもわれる。

ヘルダーの思想の根底には、ハーマンとさらにライプニッツから受け継いだ、バロック的でもありヘレニズム・ビザンチン的でもある力の形而上学や Verbum（生きてはたらく言葉）の形而上学があり、それが彼の言語（起源）論や彫刻論の支えとなっていた。

まず、順序を逆にして Verbum の形而上学のはうからいうと、キリスト教神学の伝統で三位一体の神の第二位格（子）に比定

されるロゴス（もちろん、ヨハネ福音書の冒頭で「はじめにロゴスがあった」といわれる時のロゴス）、世界を産み出さないし流出させる力としてのロゴス（ヘブライ語のダーバル）をラテン語に移したのが Verbum である。ロゴスのラテン語訳には、周知のようにもう一つ ratio があるが、元来ロゴスのうちに含まれていた ratio と、とりわけ中近東的バイアスの強いヘレニズム・ビザンチン期の意味を承ける Verbum の流れが、ヨーロッパ精神史において並行し、前者の Rationalismus（さらには理性批判）の契機がとりわけ近世においては主流を占め、後者の Verbum-Metaphysik (Gadamer) は近世にあつてはどちらかというと伏流水ないし地下水脈の位置に甘んずるというのが大まかな見取り図である。象徴的な名前をあげるとすれば、前者はデカルト、カント、後者はライプニッツ（微積分的・生成文法的な言語論、記号論の構想）、ハーマン、ヘルダーである。

ライプニッツの *aperception* をカントとはちがった（どちらかといえば後のメーヌ・ド・ビランの *aperception immédiate interne* に近い）方向で、Besonnenheit（「おもんばかり」）として受け継ぎ、「詩は人類の母語」とするハーマンの『美学綱要』（一七六二年）における詩的言語の基底性の考えと重ね合わせるところに構想されたヘルダーのダイナミックな『言語起源論』（一七七二年）は、そうおもってみれば、Verbum の形而上学の近代における典型的なあらわれと見なしうるものである。ちなみに、

この言語起源論を含むヘルダーの初期の言語思想と文学論は、シュトルム・ウント・ドランクの火付け役となったが、言語上の民族主義ともいえるこのドイツ語の市民権獲得運動は、それでも多くの言語に對等の権利を認める点で、後のヘルダーの歴史哲学とおなじく、自民族中心主義的な傾向のむしろ対極に立つものであった。(ヘルダーには後に *Stimmen der Völker in Liedern* と題された民謡の集成(一七七八―八九九)があり、この種の仕事でも後のアルニムやブレンターノに先駆けるものであった。ちなみに、*Verbum-Metaphysik* に直接関わる仕事として、若いヘルダーが司教区に提出した論文 *De Spiritu sancto autore salutis humane*, *Theses Theologiae*, 1767 があ⁹)

さて、ヘルダーは、『彫塑』(Plastik)(一七八年)において、ライプニッツの哲学を受け継ぎつつ、きわめてユニークな触覚論、力動空間論を展開する。すなわち、ものごとの秩序には、①継起(Nacheinander)の秩序、②併存(Nebeneinander)の秩序、③相互浸透(ineinander)の秩序があり、それぞれに時間、空間、力、が対応し、芸術のジャンルとしては、音楽(詩)、絵画、彫刻が表現形式として対応する、とするのである。触覚の基底性を(バークリのように単に認識論的にはなく)美学・芸術学的に主張した論者を、近代ヨーロッパにおいて私は他に知らない。

『純粹理性批判』(一七八一年)の刊行直後に、ハーマンは『理性の純粹主義(Purismus)にたいするメタ批判』という短い論文

を書いて友人間に回覧したが、この着想を承けてヘルダーはその晩年に『純粹理性批判へのメタ批判』(一七九九年)と『カリゴネー』(一八〇〇年、『判断力批判』へのメタ批判)を公にする。これらはいずれも巨視的に見ると *ratio* の立場に對する *verbum* の立場からのリアクションと見なしうるもので、そうした眼で読みなおしてみると、きわめて今日的観点からして興味深いものである。

和辻はカントの巨人的な業の前ではヘルダーの批判は蠅(こ)の斧に等しいといっているが、はたして実際にヘルダーの『メタ・クリティーク』を精読した上での批判なのか、当時の一般的な世評にしたがったものか詳らかにしない。(法政大学図書館におさまられている和辻文庫の蔵書目録にはヘルダーは一冊もなく、和辻がどの版の全集でヘルダーのどの著作を読んだかは目下のところ不明である。)

ともあれ、現在チャールズ・テイラーやサンデルらの多文化主義(multiculturalism)の先駆としてあらためて注目されているヘルダーの歴史哲学は、以上に見たような力の形而上学、ヴェルブムの形而上学の多彩な展開を背景として形づくられたものにはかならなかった。和辻の思索は、こうした展開の全体と対比しつつ、あらためて批判的に検討、継承されるべきものだろう。

五

新プラトン主義の *Logos-Verbum* の形而上学は、時代的にも

内容的にも唯識や密教に近いものを多くもつ。

偽ディオニシオス・アレオパギテースは、五世紀頃シリアで活躍した思想家であるが、アサンガ、ヴァスヴァンドゥの同時代人である。密教の大成、中国伝来は七、八世紀なので、時代はすこしずれるが、「最後のギリシャ教父」といわれるダマスコス（ヨアンネス（c.650-c.750年）とは同時代である。グノーシスと初期大乘経典の間のありうる交流については、最近刊行の『比較思想事典』に立ち入った記述があるが、すこし下った以上の時代についても、ササン朝ペルシャを介して、すくなくとも間接の影響・交流がありえたことだろう。（仏教とキリスト教の対話などというのも、このあたりまでさかのぼってみれば、今日よりはるかに風通しのよいものでありえたかもしれない。）さらに、ヨーロッパ世界に偽ディオニシオスの思想を移植したヨハンネス・スコトゥス・エリウゲナ（c.815-c.877年）と、日本に密教をもたらした空海（七七四―八三五年）は、ほぼおなじ九世紀前半に活躍している。エリウゲナも空海も、ハイブラウでかつきわめて精緻に洗練されたインテレクチュアル向きの思弁をよくするが、しかし、民衆の靈性に深く根ざし、それと還流する側面がないではない多面的な影響力を後世にまでおよぼした思想家である。この両者のうち、とりわけエリウゲナに関しては、従来ともすれば、亜流、二流の思想家と見なされがちであった。しかし、実際は、偽ディオニシオス・アレオパギテースから、エリウゲナ、

サント・ヴィクトールのリカルドス、ボナヴェントラを通して展開される Verbum の形而上学は、ヨーロッパの靈性のバックボーンをなすといつてよい位置を占めるものである。さかのぼって、今しがた触れたダマスコスのヨアンネスらの個体と宇宙の相関をめぐる思弁は、古代末中近東世界から中世ヨーロッパ世界を通じて、ニコラウス・クザヌスからライフニッツまで、中近東・西欧的スピリチュアリティのバックボーンをなしている。（『ビザンチンの比喩的（アレゴリー的）解釈の想像力は、ヘルダーからベンヤミンにいたる近代の思想家たちの靈感の源泉でありつづけた。』）

ほぼ同様のことは、不空（Amoghavajra）、恵果、空海とつづき密教についてもいえるだろう。ヒンドゥー的想像力をたつぷり吸収した仏教思想のファイナル・ステージは、多くの後世の民衆と思想家たちの豊かな靈感の源泉となるのである。

このあたりへの関心が和辻で抜け落ちているのは何を意味するか。近代日本のメンタリティのあり方にまで関わる問題だろう。

和辻の仏教研究（キリスト教研究も）は、原始仏教、原始キリスト教に傾くくらいがある。（原始儒教についてもおなじか。）原理主義とまではいわないが、一種原理主義的メンタリティと近代の国民国家の支柱となる（非寛容、排他的、ときに選民思想までをとまなう）イデオロギーとの間には、何か浅からざる絆がある

のかもしれない。

和辻に密教的なものへの関心が欠落していることについては、早く梅原猛の指摘があるが、なお今後の検討課題だろう。

(さかべ・めぐみ、西洋近現代哲学、

桜美林大学教授・東京大学名誉教授)